

“驟雨”とは急に降りだし、間もなくやんでしまう雨、と広辞苑。昨日の雨は、その「間もなく」が1時間もかかったかな。最近の何日かは天候不順が続いている。と言ってもずっと雨とか、ずっと風とかではない。「ああい天気だ」

と朝は晴れていたのに、なんとなく空がぼんやりしてきて、風が吹き、風が強く冷たくなり、雨が降り雷が鳴る。ポツリポツリの小雨が、ポツリポツリで終わることもあれば、ザーザー勢よく降る事もある。先日安威川にいた時も土手に着いた頃から、ややこしい天気だと思っていた。上流に向かって10分ぐらい、冷たい風が心地よかった、と思っているうちにポツリポツリと来た。30分たってもポツリポツリのままだった。「仕事場の窓を開けてきた…干しているものが濡れるなあ…」と振り返っても詮無く、出発点辺りに戻ると、地面が濡れていない。まさかと思ったが、この辺りも自宅の方も降らなかったようだ。まさに「馬の背を分ける雨」だった。

もっともこの辺りの地形、川の上流は山だ。小高い山だけれど、平地に比べて雨は多い。住んでいる平地の辺りが晴れていても、山が曇って見えないことがある。あの曇り方は、あの辺り天気が悪いのだろう。冬は白く曇っている。小雪が降っているのだろう。

車がビュンビュン走る道路の歩道を、自転車であらわして走っていた。走りながら「家に帰りつくまでに来る…」と思った。家までは30分。「何時、どの程度の雨かが問題だ」と思いながら走っていた。冷たい風が吹いてきた。横に大きなスーパーマーケットがある。そこに入って1時間ぐらいやり過ぎそうかとも思ったが、まだ降ってこない。空は暗く、雲は垂れ込め、何時降ってもおかしくない。と、ポツリポツリと来た。それからが早い。「よしあそこ」と跨道橋のある大きな交差点の橋の下に逃げ込んだ。反対側にレストランがある。あれにするかと迷っているうちに、豪雨と強風でもう動けない。そこにはおっさんと学生、間もなく単車の警察官、単車のあんちゃん、おっさんに主婦と何人かが雨宿り。幅の広い橋なのに強風で雨水が舞っている。服が濡れる。「ヒュー寒い」と震える。大きな交差点、車が右に左に止まっては走る。ワイパーをフル回転させて、ライトを点けている。

この雨も、自宅付近は吹き荒れていたようだが、高槻辺りに住む友人は「遠くに雷は聞いたが、雨は無かった」という。

思い出したが、2年ぐらい前の夏の北アルプス、北の俣岳から下る途中で、ゴロピカが来てたちまち降り出した。木も何もなし斜面、こんなところでの雷は怖い。「これはやばい」と、窪地に腰を下ろした。しばらくすると上から雨水が流れてきた。雨水がたちまち流れになった。ゴロピカが少し遠のいたので、慌てて降りた。上下の雨具を着けていても、ずぶ濡れだった。ずぶ濡れの経験は結構あるものだ。

絵を教えるという作業「これなかなか面白い」と思うようになったのは最近。いろんな人が、いろんな手法、感性で描いている。「子どもの頃以来の画筆だが、ちょっとやってみたい、絵を描いてみたい」とやって来られる。「難しいこと抜き、1時間2時間、楽しめたらいい、楽しんで尚且つ、ちょっといい作品ができればもっといい」初心者と10年選手の庶民派マダム達、野菜、花、とたくさん持ち寄って、絵筆を動かしている。下図の段階で「もう少し大きく…」「もう少し上に下にずらして…」画面の中心にこじんまりと描いてもつまらないですよ…」とアドバイスとおぼしきものやら、ぼやきやら、わかった様な事を、わからない様な事、をつぶやき続ける。

初心者の方が教えやすい。オレ、レッスンプロではないので、よその方に教えられてからオレのところにくられた方々に、なんと言っているの、何を言ったらいいのかわからない。よその方はオレのようにいい加減な教え方はしないと思う。デッサンをして、光と影を見極めて、7:3に分けた構図が大事ですよ、なんて呪文のような事を言って、教えるのかな。そんな事は糞くらえ

で、先ほども言ったように、「難しいこと抜き、1時間2時間、楽しめたらいい、楽しんで尚且つ、ちょっといい作品ができればもつといい」が一番大事。

写真家の中西プロが「オレ、人には教えられん。上手ですねえ、きれいですねえ、なんて世辞言って、トウシロウに教えられないね」とよくいう。彼はそういう人だと思う。その分、注文仕事も、ライフワーク的な普段仕事も大事に撮っている。余談だが、彼、空撮がほんとに好きみたい。高い金を払い、飛行機を雇って、写真を撮っている。今の時代、素人写真家が増えてきて、プロ写真の需要が減ったそうだが、空撮は、素人に無理だ。自転飛行機を買って、一人で飛び回って撮れたら最高だろうな、と思う。自転飛行機のペダルをこいで、好きな処を撮りまくればいい、といったら、「馬鹿な事を言うな、落ちたら死ぬぞ」と怒られそう。

みなさんの絵を見ていて「え！」と思う事がよくある。これは、困った、困った事を描いているなあ、というのではなく、なんとおもしろい、どこからこんな発想が出てきたのかな、という感動に近い「え！」である。絵に関して、素養も知識もない人が、自分なりの方法やら規則やらを作って、表現している。もちろんちょっと経験した人ならそれらの、方法やら規則やらが過去にいくつもあった事は知っているし、わかっている。でもその人たちは、その人たちなりに、発見して、開発して、生み出して、考えだしての、方法やら規則やら、なのだ。そんな時は間髪をいれずに「それはいいものなのだ」「大事にしなければいけない物なのだ」という事を何度も吹き込む。でないと、その人たちは、その方法やら規則やらが、“いいもの”とも“悪いもの”とも思っていないというより、時間の流れの中の現象で、右から左へ忘れてしまう。

「これはいい」「これはすごい」「これを守って」

「なんで・・・」「これのどこが・・・」

と疑心暗鬼。でも一日それを続けると、なんと独特の絵が仕上がる。

普通の絵、きれいな絵、よくある絵、ではないけれど、その人だけの絵が仕上がる。

その人の喜びが伝わる。

我がアトリエに来て、一心不乱に描いている人たちがいる。この人たちはまた別だ。一日一枚の人。二回で一枚の人。季節で一枚の人。我がアトリエは人数が少ないけど、一心不乱の集まりだ。みんなすごいよ。この話は次回に。

図版は定点風景。いいのができそう・・・かな。

0077 驚いたこと 120612

え！と驚く事がある。こんなに長い間生きてきた、生活してきたはずなのに「こういう事があったのか・・・こういう方法があったのか・・・こういう考え方があったのか・・・」と驚く。

明日朝の7時に天王寺駅に行きたいが、何時の電車に乗ればいいのかと、パソコンで検索してみた。JRの茨木駅まで自転車で行き、大阪駅で環状線に乗り換えるのが一番早いはずと思っていた。パソコンの答えは、JR茨木駅→新大阪駅→紀州線快速で天王寺駅と出た。「ふう～ん」そうか。と因みに阪急電車を調べてみた。阪急茨木市駅→南方→地下鉄御堂筋線に乗り換え天王寺、と出ている。しかもこれが一番早い。そんな事は・・・？と何度も検索したが、間違いはなかった。まさに“え！”である。長い間この電車を利用してきて、乗り換え場所が南方駅とは・・・しかも、このほうが早いとは・・・負け惜しみではないが、条件が、休日の早朝ということで、この答えが出たが、絶対これではないだろうと、未だに疑っている。と言いながら、つまらん話だ、大の男がわざわざ言うことか、とも反省。

もうひとつ、驚いた話をしたいが、今は天王寺駅の話。7時少し前に天王寺駅についた。便意を催し、車に乗ってから「便所」と叫ぶのもどうかと、駅のトイレに。地上に出たのは7時を3分ほど過ぎていた。オレが最後だったようだが、総勢10人ぐらい、2台の車に便乗して、一路、奈良の山奥“七面山”に向かった。十津川村に向かってくねくねと昔ながらの国道を進むと、去年

の豪雨水害の爪痕が、まだまだ生々しい。あちこちに土砂崩れの跡、木がなぎ倒され、デカイ石の交じった土砂が上から谷に向かって流れ落ちている。その量は道路を壊滅的に覆い隠している。あの斜面に道路を修復するのは不可能だろうと、素人ながら分かるぐらいに、地面がえぐれている。目的地、七面山登山口の手前で、通行止めになっていた。この先にまだもうひとつ集落があるはずだが、そこの人たちはどうなったのだろうか。目的地を変えよう、ということで、我々が“山のマイスター” 澤山さん(これからはこう呼ぶ、山の事なら何でも知っている、では言ったやつの顔が浮かんで、チト失礼だ)「釈迦にしよう」の一言で、引き返して釈迦ヶ岳の登ることにした。

十津川村は大阪からは遠い。オレも含めて皆さん、朝は5時ころに起きている。通行止めのロスタイムが1時間ほどあったが、10:30分に登山開始。今回は、送料込7千円で買った登山靴の試し履き。登山靴としては安いとはいえ、使い物にならないのなら痛手だ。山の中を6時間ほど行動した。最初の1時間は、右足の親指辺りが痛いかなと感じていた。3ピッチ目ぐらいから、左の土ふまずが痛くなった。後は最後まで、何とか履き通せたが、皮に靴の硬い感じを思い出した。皮の靴はこんなものだった、今時の靴の軽さ、足へのフィット感はないが、この硬さが皮だった。皮の靴はこれだ。これでいいのだ。

泥が付いたまま、リュックに入れて帰ってきて、今朝水で洗った。なんと裏のゴムが剥がれかけている。靴用のボンドを買ってきて糊づけしなければ。ま、この靴とは長く付き合えそう。靴下の厚いものも買わなければ。

釈迦ヶ岳は、何年か前にも来ていたはずだが、もうひとつ記憶が薄い。てっぺんに緑青色の観音さんが立っているの、見た事があるような気がする。下山は別ルートと道を変えて歩いているうちに、「おお前鬼」と知っている小屋が見えた。“前鬼”とは魅力的な名前と思いませんか。役の行者の名前だそう。そこからまた上にあがって、帰ってきた。満足である。

0078 驚いたことⅡ 160612

佐藤優著『国体の神髄』を読んだ。真髄ではなく、神だ。

『国体の本義』読み解くと、副題が付いている。一世紀前ぐらい前に作られた本で、太平洋戦争(第二次世界大戦)が終わって、占領軍の命令で発禁となったとか。

<日本とは><国の始まり><万世一系の天皇><古事記・日本書紀の事><教育勅語><神々><神道><稲穂>
こんな言葉が続く。こういう考えに再び目覚めよ、という人がいる、そういわれたらと、驚く。

終戦後の日本のあり方は間違っている。あれは占領軍に押しつけられた考え方、占領軍が創作した事件事象だ。戦争中当時日本も日本軍も、違反行為はしていない。と発言する人も増えてきた。

66年前、太平洋戦争(第二次世界大戦)が終わった。残念ながら、日本は敗戦国となった。

それまでの国の体制ががらりと変わったと思う。

今、70歳代、60歳代の人たちは、それまでとは、がらりと変わった教育を、考え方を、国の体制を教えられてきた。

我々その世代は、占領軍に押しつけられた考え方、占領軍が創作した事件事象を信じてきたのかもしれない。

戦後65年、ずっとそのような教育を受けてきたが、戦勝国の立場になって、また第三者の立場になって考えた。

「君のところは考え方が、体制が間違っているから、憲法を変えよう、我々が作ってあげる」

「経済がうまく行っていないから、金を貸してあげよう」

「食糧が不足しているから、食糧、衣料、日用品をあげよう」

金を貸してあげよう、食糧あげよう、は戦争で疲弊した国民にとってありがたいことだ。

が、今の世界で、憲法を、作ってあげる。教育の中で、偏った考え方は、教えてはいけない。戦勝国にとって、都合の悪い事はしてはいけない。という戦勝国があれば、世界は非難をするだろう。

憲法を、作ってあげる。教育の中で、偏った考え方は、教えてはいけない。日本は、これを受諾してきたのだ。

66年経って、「今がいい」いや、「昔の考え方を取り戻すべきだ」と様々叫ばれる。あまりに様々な考え方が、色々な考え方がありすぎて、すべてが希釈されて、叫びが雑音になってしまっている。よくないねえ。自分の考えを持とう。TVばかり見て、TVの考え方を自分のものだと思うな。なんてえらそうには、嘸(うそぶ)けないけど。オレももっと自分の意見をはっきりと表現しよう！

“タイサンボクの花を見て”

ボテリとした 白い色
オレの顔ぐらいの 大きさ
風が あまいかおりを 持ってくる
ここは二階の まど
すぐそこに 白い色が ある
白い色は 一日だ
あしたは 茶色く 萎びる
今年はまだ 刺されて いない
かゆく ない
ことしは 蚊 休みかな

図版はGWに入った馬場島。そこに架かった工事用の「橋と雪解け水」の絵。
うまくいった。描けた。

0079 わからん わからん 180612

わからん わからん わからん
ほんと わからん ね
なんで あんなにも うまく いく
解決 である
朝は 何を していた のだ
オレ 朝から一心不乱、一生懸命 やって いたように 思っ て いたが
本当は 踏んで なかった のだ
浮遊している フラフラと
なにもかも 決まっ て いない
決まっ て いない ということ は
なにも ない と いうこと か

下の図版。いい絵ができた。まだ途中。途中がいい。これが問題だ。途中がいいとはづらい。

工藤美代子著「良寛の恋」(炎の女 貞心尼)を読んだ。良寛 70 歳、貞心尼 30 歳。出会い、歌を読み合い、良寛の最期を看取った。どういう関係だったのか、何処まで進んだ関係だったのか、と工藤先生の話は続く。つまらん、つまらん、そんなことはど

うでもいい。芸能ニュースではあるまいし。下半身の事をとやかく詮索するな。オレも、木石ではなし、下半身の話も好きですよ、おおいに好きですよ、好きだけれどもそれは、ポルノグラフィーの世界だけでいい。歴史上の人物のパンツの中の話なぞ、聞きたくもないねえ。

この歌は、死ぬ前の、小便垂れの話。夜が明けたなら、尿の垂れ流しを、彼女が洗ってくれる。歌が読めるのはいい。なんとオレにはその素養が無い。歌が読めない。歌がわからない。絵はもつとわからない。

この夜らの いつか明けなん
この夜らの 明けはなれなば
をみな来て 尿をあらはむ
こいまろび 明かしかねけり
ながきこの夜を

0080 ルオー 210612

Georges Rouault ジョルジョ・ルオー

1958年没 とは驚き。最近の人なのだ。マティスと美術学校が同期。

河川敷を走りながら、“ルオー”を思い出した。この絵が好きなのだ。若いころから一番好きだった。最近あまり人々が彼の名を口にしなくなった。知らないという若者もいる。世の中、変遷のスピードが速すぎる。若いころに在ったもの、夢中になったもの、場所も空間も考え方も、変り方が早すぎる。そういうものは最近ないですよ、そういう考え方はもうしなくなりましたよ、というようになってきた。この半世紀の間に、何もかもが、ガラッと変わってしまうのは、よくない。よくないし、淋しい。絵の勉強を始めた頃に、画材屋の棚にズラリと並んでいた絵の具が、様変わりした。「え、あの絵の具どこにいった」絵の具の棚まで変身するのは・・。

早速家に帰って、画集を引っ張り出して見た。長い間ルオーの絵を見ていなかった。やはりいい、いい絵だ。昔は、とにもかくにも、彼の油絵が好きだった。何回塗り重ねているのかと、あきれぐるぐらいに塗り重ね、おそらく元の絵はどこかに行ってしまう、最終仕上げだけが、完成品として見られるのだが、途中が見られたら素晴らしいだろうね。いや、もし可能なら、ぜひ見てみたいものだが、それは無い物ねだり、そのマチエールのデコボコ感、ダークな色の中に、赤、黄、緑の鮮やかな色が所々に見え隠れしている。

画集を見ていると、ルオーの題材は、キリスト教、サーカス、娼婦が多い。展覧会に出品した当時、世間は恐ろしい苦悩を描いた醜い絵と、酷評したとか。レンブラントの画風、ゴヤの醜い画風に傾倒していったと、評論家先生。

“好きだ好きだ”で見てきたオレ、気付かなかったが、題材のキリスト教、サーカス、娼婦には意味があるのだろうね。それを理解しないとルオーの考え方、生き方がわからない。わからないままに見ていると、それこそただ“好きだ好きだ”で終わってしまう。が、オレはルオーに関して“好きだ好きだ”でいい、それですましてしまう。

レンブラントの暗い画風、ゴヤの醜い画風といわれると、なるほどと思う。当時サロンに飾られた花鳥風月、美男美女の絵ではない。題材も技法もサロン風ではない。ただ、醜い絵、汚い絵、とんでもない題材の絵等は、日本にもヨーロッパにもたくさんある。そんなたくさんの絵が頭の中をよぎる。表現されたものが、きれいなものだけ、美しいものだけがいいなんて幻想はいけませんぞ。きれいなものもいいけど、汚いものも、素晴らしいとみなさん頭を切替えてください。

またまた画集を見る。油絵のダークな色層の中に、茶色、青色と感じさせる。暗い色、茶色、青色、緑色とそれこそ色々、色を重ねているうちに、不思議な深みが出ている。その深みの横に白い絵の具が置かれている。その白色の上に黄色、赤色、とうすら塗られている。なんとと言えない諧調が見える。トロケテいる。いいなあ・・である。

0081 石川啄木 250612

漂泊の詩人<石川啄木> 別冊太陽

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

初めての歌集「一握の砂」が明治43年に東雲堂書店から発行された。定価60銭也

東海の・・はその本の中で、最初の歌として載っているそうだ。死の2,3年前にこの歌集が出版されたらしい。本屋も本人もえらいものだ。よくぞ出したり、よくぞ天才を見つけたり。

石川啄木は26歳で亡くなっている。その歳の頃オレはいったい何をしていたのだと、と考えるとぞっとするので、それは考えないことにしよう。コロコロ紡ぎだされる言葉は、三行に並んだ言葉は、石コロが宝石になって光っている。

青少年の10年の間に作った歌。手紙や文章を読んでみると、多感な少年の、昂ぶった、高揚した叫びが伝わってくる。生きること、異性の事、病の事、現実の死の事、まわりの環境やら体制やら。じっくり見ると、稚拙な処、わがままで生意気な処が目につくが、歌はうまい。

家族は、嫁と子ども3人。3人の子どもは、一人が生後間もなく、二人は二十歳前後に亡くなっている。本人が26歳で、嫁がその後すぐに亡くなっている。当時の不治の病、老咳と言われた肺病だそうだ。これだけ見ても「悲しい」「涙」と言葉が出てくるのは分かる。結婚して、職を得て、職を次々換えて、転居して、旅をして、何人かの憧れた女性がいて、言葉を光らせて行った。一つ面白い歌を、見つけた。こういわれると、うまいと思う。

「石川は ふびんな奴だ」
ときにかう 自分で言ひて
かなしみてみる

他の芸術家も含めて、その生い立ち、その生き様、その経歴・閨閥、そんな解説やら説明は要らない。その生きざまを聞いて、読んで、アアなるほどとは言いたくない。彼らの珠玉の言葉・音・色があればいい。

とは思うが、悲しいかな、オレには彼らの珠玉の言葉・音・色だけを、捉えられない、理解できない、感じられない。それらを捉えるだけの能力が無いのだ。「なんだ、ブランドものなんか」と悪態をつくが、人が選ぶ“ブランドもの”には、選ばれてきた歴史がある、信用がある。「あれ、いいかもしれない」と恐る恐る叫んでみても、人が後から付いてこない、これはオレの「独りよがり」と、疑心暗鬼になる。オレの審美眼が歪んでいるのか、見えていないのかと、疑ってしまい遂には黙ってしまう。オレだけではなく皆さんも、ですよ。見る目、聴く耳、感じる心、考える脳を持ちましょうね。

東北をフラフラしていて、石川啄木の句碑を見た。あの辺りもう一度訪ねたいものだ。

図版は、大地が全部牧場という風景を思い出して。

えかきのぼやきに“きぬちゃん”投稿「建築家は人のために設計するが、画家は自分のために描く・・・」

一昨日何人かで飲んだ。泊まっているヨットの上で飲んだ。建築デザイナーとグラフィックデザイナー二人ずつ、土木屋さん、オレ。愉快地話し合った。ヨットから降りて帰ろうとする時、Mさんが落ちかけた。慌ててうしろから抱きとめた。靴が少し浸かった。波の穏やかな海で、ドブリとはまった処で危険はない。山なら大怪我で大変なことだと思ったら、本人には失礼だが、クスクス。我らが友人の橋本船長の話では、酔ってドブリはよくあることだとか。

絵の勉強を始めた頃、デザインが志望のひとと、絵が志望のひととは接点がなかった。当時、美術学校は、洋画、日本画、彫刻の分野。陶芸、木工、金工等の工芸の分野。デザインの3つの分野があったのかな。オレ最初から“絵”と決めていたので、他の分野のひととは交流がなかった。多分デッサン、水彩画等の基礎の勉強は同じかもしれないけど、美術学校に行かなかったので知らない。○○君はインテリやデザイン志望、○○さんは染織希望なんてことは知っていたけど、そこから先は知らずにいた。

投稿“きぬちゃん”が「デザイナーが作った建築はNO! 」という。「使う、という機能を見捨てている。デザイナーがデザインすることを楽しんでいるだけ。格好ばかりが先行。格好などどうでもいい。使いやすく、働きやすい職場の空間でないと・・・」とよくこぼしている。聞くと彼の職場である診療所は、デザイナーが設計したらいい。診療所には2,3回行って外も中も見したが、デザインの的にGOODとは思わなかった。というより、何も印象に残っていない。

木造の古い我が家の改造に、友人のGENさんが設計してくれた。それから3年経った。漆喰の白い壁、茶色の木、と本当に惚れ惚れする。「いい空間だ・・・」は「心底、楽しい・・・」に繋がる。口でも、文章でも説明できないし、物をお見せできないのが残念。

昔、絵と交換してと、電通？出入りのデザイナーに名刺を創ってもらった。デザインの版下を見せてもらった時に「いいな・・・」「うれしいな・・・」と思った。オリジナルなものが、自分のものになるという、なんとも贅沢な話、気持ちいい、心地いい。

あらゆる分野のアートにしてもデザインにしても、いいものはいい。よくないものはよくない。“創りテ”はよりいいものを。“被創りテ”、なんてケタイな言葉だが、見る側、使う側の人には、それを見る目、見分ける目を持たなければいけませんぞと、自戒も込めて。いいものを見る人が多くなれば、“創りテ”もオチオチできなくなる。いいもの、万歳である。

同じヨットの話が、十割蕎麦むもんのブログに掲載されています。

安威川に来て走り出したが、やはりおかしい。耳がツンとする、頭がボ～ツとする、力が出ない、気だるい、元気がない。いつもの半分の時間で切り上げて帰った。昨日の寝不足が原因か思いながらも着替えもせずにそのまま毛布を被って寝た。2,3時間寝た。まだまだ身体は重い、腹が減った、のどが渴いた、身体がベタベタと起き上がって、パンを焼きコーヒーを飲みシャワーをした。あたまが痛い、咳、鼻づまり、熱は無い。これは風邪か。2,3日前から間接が痛い、腰が重い。何時も風邪をひく前にはこうなるが、今日のこの体調は何なのだ、何かおかしい病気の兆候、単なる疲れ、普段から病気がないので不安がいっぱいだが、食欲があるからまあいいかなと思ひ、ボ～っとしながら夜は8時頃から寝た。

朝、腰の痛みも引いている。治った。昨日の気だるさは何だったのか、風邪の一手手前か、熱中症か、風邪ならおかしな風邪だ。「痛い、だるい」と身体の不調をよく訴える人がいるが、オレ自分の身体の調子が悪い、痛い、だるいとは人前であまり言わない。自分の状態を、体調を皆さんに発信しないタイプですなどと、大袈裟なものではないが、シャイなのか物臭さなのか、言いませんね、発信しませんね。いやいやもう年なのだから、色々愚痴って訴えてみますか。

もう四半世紀も前の若いころの話。近所に棲む画家の T 君等と(普通は名前を出す、話が話なので)○○嬢の引っ越しを手伝って、新居のマンションで引っ越し祝いを馳走になった。後日 T 君と二人で飲んだ際、彼のおもしろい告白。「引っ越しの馳走になった日、トイレで小便をしようと息んだ時に多少緩んでいたのか糞まで出た。えらいことだどうしようと、隣の風呂でパンツを脱いで、尻やらパンツやらを洗って、すました顔をして、事なきを得た」「風呂で水を掛けるが糞がなかなか流れてくれないのには、困ったよ」そんな武勇伝を聞いて驚くやらおかしいやら大笑い。そんなみっともない話、恥ずかしい事をよくもオレに話せるなど感心し敬服しながらも大笑い。

振り返れば、オレも今まで脱糞の失敗はいくつかあったが、そんな話は言わないぞ、絶対に言いませんぞ。困ったことに、最近では脱糞ばかりか、小便まで加わってきた、いやだねえ。

小便垂れをしてしまったと詠む歌人。

借金まみれだと豪語するアーティスト。

愛しあっている、それがこじれているとこまごま説明する文人。

皆さんご活躍だ。